

李伯元の『南亭四話』について

麦 生 登 美 江

は じ め に

李伯元(1867—1906)の『南亭四話』(以下『四話』と略す)は1925年に出版された。¹⁾ それについて、李伯元の友人、古稀老人は『四話』の序において以下のように述べている。少し長いが李伯元の経歴の紹介を兼ねて引用しよう。

南亭四話、一聯話、一詩話、一詞話、一叢話は毗陵²⁾の李伯元徵君の撰である。徵君は見聞は広く、学問は深く、詞章にはとくにすぐれている。一度、経済特科に推せんされたが応じず、上海に遊んで遊戯報を刊行して小報の創始者となり、その風語華言は今に至るも人口に膾炙している。暇がある時は著述をして自ら娛しんでいた。死後、遺稿は多く散失したが、南亭筆記の一書は大東主人がすでに刊行し³⁾、読書人はみなそれを珍重している。ここにまたその四話を得た。(1頁)

『四話』は李伯元の死後19年も経過してから出版されたせいもあるのか、彼の小説ほどには有名でなく、内容はおろか、この書名を紹介している研究論文

1) 孔另境輯録『中国小説史料』古典文学出版社 1957年 上海 237頁

但し、本稿で使用したテキストは、清・李宝嘉撰『南亭四話』——詩話、聯話、詞話、叢話——中華民国60年4月初版広文書局有限公司発行のものである。頁数はこのテキストの頁を示す。またAは莊諧詩話を、Bは莊諧聯話を、Cは莊諧詞話を、Dは莊諧叢話を示す。

2) 江蘇省武進県

3) 1924年刊。1)の『中国小説史料』に同じ。未見。

や文学史さえ数少ない。従って『四話』に関する専論としては拙稿が最初のものだと思われるので、まず『四話』そのものについて少し触れておきたい。

『四話』は「莊諧詩話」4巻、「莊諧聯話」3巻、「莊諧詞話」1巻、「莊諧叢話」1巻の計9巻から成立している。しかし、量的には「詩話」が全体の半ば以上を占め、「聯話」が四十数%、「詞話」は0.5%、「叢話」は1%弱という構成になっている。だから『四話』とは言え「詩話」と「聯話」が主要部分であると考えられる。

この“莊諧”という題目について、前述の古稀老人が「その莊の部分のもとより詞章家の標準となすに足るし、諧の部分もまた酒後茶余の消遣の具にふさわしい。先人の陳腐なこと、近來の人の空疎なことばかりを寄せ集めて本を作る者に比べれば（四話は……引用者註）どれ位すぐれていることだろう」（1頁）とその序で述べているように、『四話』においては古今の人の作をまじめに論評している部分と、官僚、文人あるいは庶民の笑話やエピソードの部分とが錯綜している。

その点、例えば梁啓超の『飲冰室詩話』などからは、いかにも変法派のリーダーらしく詩の選択の基準、批評の視点にも〈詩界革命〉に寄与し、変法維新運動を推進するという一貫した姿勢が看取できるのだが、この『四話』は反対にとにかく目にとまった優れたもの、おもしろそうなものを手当たりしだいに取り上げた感が強い。

登場する作者も天子や高級官僚から和尚・役者・女性・流浪の民まで種々雑多であるし（とは言え、圧倒的多数を占めているのはもちろん官僚・文人などいわゆる士大夫階層である）、さらに少数ではあるが日本人や朝鮮人の作まで含まれている。⁴⁾

収集の方法も、書物の中から目にとまった作品を書き抜いたもの、寄稿作、友人に教示されたもの、旅行中、壁などに書きつけられた作品を書きとめたも

4) 日本人の作としては長谷川陸軍大将の“日将詩”三絶をあげ、「儒将の風流を見るに足る」（A—183～4頁）と評している。また「莊諧叢話」の冒頭には安積銀齊の“送行序”がおかれ、「その文は勁拔豪放であり、日本人の中ではこれほど巧みに作れる者は他にないだろう」（D—539頁）と述べている。朝鮮人の作では“朝鮮忠臣詞”（C—535頁）が取り上げられている。

のなど様々である。従って『四話』の分析はひじょうに複雑で困難なのであるが、以下、李伯元自身の評語や作品を手がかりにして少し検討してみたい。

李伯元の詩文観

李伯元の詩文観をよく表している評語としてまず「詩は性情をのびやかにすることで風に浴みし詠じて帰るのである。それが鶯が飛び、魚が躍るようにいきいきしていた場合にその詩作技術もまた奥義に近づいていく。思うに作者がある光景を目にしてそれを描こうとする際に、水に浮かんだ月、鏡にうつった花のように深いおもむきを持たないものはなく、少しも皮骨にまつわりつくようなリアリティがない。であればどうして軽薄で見識のせまい者に詩が作れようか。たとえば巨公の一二の詠物詩にはその風流な余韻が十分に現われている。」(A-189頁)という一節があり、呉県の陳嗣初⁵⁾の“女郎，月下に衣を裁つ”という次の詩をあげ、「造語冷艶」と評している。

香幃風捲月团团。睡起裁衣思万端。
秋葉未紅金剪冷。玉門関外不勝寒。

香幃 風捲きて 月 团团
睡起して衣を裁てば 思い万端
秋葉未だ紅からざるに 金剪冷ややかなり
玉門関の外 寒さに勝えず (A-189頁)

確かに李白の“子夜呉歌”其の三

長安一片月 万戸擣衣声
秋風吹不尽 總是玉関情

5) 明の人、陳継のこと。嗣初は字。号は怡菴・存正齋。経学に通じ、陳五経と称せらる。著に怡菴集がある。

何日平胡虜 良人罷遠征

長安 一片の月 万戸 衣を擣つ声

秋風 吹きて尽きず

総べて是れ 玉関の情

何れの日か 胡虜を平らげ

良人 遠征を罷めん

を想起させるような、美しさの中に悲哀のこもった詩である。この詩に続けてさらに安福の李時勉の“剪刀を詠ず”を掲げている。

吳綾剪処魚呑浪。蜀錦裁時燕掠霞。

深院響伝春昼静。小楼工罷夕陽斜。

吳綾 剪る処 魚 浪を呑み

蜀錦 裁つ時 燕 霞を掠む

深院 響きを伝え 春昼 静かなり

小楼 工罷めて 夕陽 斜めなり (A-190頁)

この詩について李伯元は「李（時勉……引用者註）の真節清声を以って詩のあでやかに美しいことかくのごときである。……李のこの詩は集中に入れられていない。先人の詩集はおおむね他人の選定を経ており、道学の体面を破壊することを恐れてつねに閒情艶体の作を削除し、応酬冗長なるものを入れる。ひじょうに嘆かわしいことである」(A-190頁)と述べている。李伯元が“閒情艶体”の作を好むせいか、『四話』には美しい詩詞、風雅な聯が多くとりあげられている。例えば「問月詞という絶妙な詞を見た」として、

多情月。掛在奈何天。

儂為甚看人離別。独自团团。

多情の月 掛かりて奈何の天に在りや
いづく
 爾 為甚 人の離別を看つつ 独自 团团 (C-513頁)
なんじ なんすれぞ ひとり

をあげている。

また岳武穆⁶⁾が兀朮⁷⁾の討伐に出かけ、翠微山に駐屯した時の詩

経年塵土満征衣。得得尋芳上翠微。

好水好山観未足。馬蹄催送月明帰。

年を経て 塵土 征衣に満つも

わざわざ はな
 得得 芳を尋ねて翠微に上る

水を好み山を好み 観ること未だ足らず

馬蹄に催送されて 月明に帰る (A-202頁)

を「風流儒雅、千古に尙つ無し」(A-202頁)と賞讃している。もし最初の一句「年を経て塵土征衣に満つ」がなければ、出征中の作とは思えないほどの情感にあふれている。情況はだいぶ異なるものの、上杉謙信の漢詩“九月十三夜”の冒頭の二句「霜は軍營に満ちて秋気清し 数行の過雁 月三更」の情趣にも通じるものがある。李伯元はそれを「風流儒雅」と言っているのである。殺伐たる出征途次の作としては佳作とみなせよう。

『四話』においても官僚や讀書人を諷刺、嘲笑した作が多いのは、いかにも『官場現形記』の作者の撰らしいが、しかし、諷刺、嘲笑、諧謔がこめられていさえすればよろこんでいるという訳ではない。それは同時に“雅”でなければならない。「文字によって人を嘲る時、もっともむずかしいのは、ことばは痛烈でしかもまた風雅を傷わないことである」といい、「謔にして雅を傷わない」(A-256頁)例として某氏の“村学塾を嘲る詩”をあげている。

6) 岳武穆は南宋の忠臣、岳飛(1103-1141)のこと。

7) 兀朮は金の太祖の第四子、完顔宗弼のこと。岳飛と相拒ぎ、秦檜が飛を殺すに及んで、遂に宋と和す。

一陣烏鴉噪曉風。諸徒齊逞好喉嚨。
趙錢孫李周吳鄭。天地元黃宇宙洪。
千字文完翻鑑略。百家姓畢理神童。
就中有個超群者。一日三行讀大中。

一陣の烏鴉 曉風さわかを噪せ
諸徒 齊しく好き喉嚨ほしいまを逞たくまます
趙錢孫李周吳鄭
天地元黃 宇宙おおは洪ひもといなり
千字文 完れば 鑑略かみりやくを翻く
百家姓 畢れば 神童かみりやくたるを理む
就中 個なかんずくの群ぐんを超ゆる者有り
一日三行 大中ちゆうちゆうを讀めり (A-256頁)

李伯元は「いわゆる大中とはけだし大学中庸のことであろう」と述べ、「末の二句はとくに卓抜している」と評しているが、村の塾の学問レベルに対する諷刺のよくきいた、滑稽味のある詩である。

さらに、ことばが“雅”であるだけではまだ足りず、“情”も伴わねばならぬ。沈鳳樓觀察の「裕朗西太僕を輓う聯」

一封輶伝。両賦皇華。大海廻瀾。
誰謂乃公非健者。
卅載故交。崇朝永訣。暗風吹雨。
我為天下哭斯人。

一たびようてん輶き伝でんを封じ 両りやうびへい皇わう華かを賦ふり 大海たいかい廻くわい瀾らんす 誰たれか謂いう 乃公なりこうは健者けんしや
に非ひずと
卅載さうざいの故交ここう 崇朝しゆうしやう永訣えいけつし 暗風あんぷう 雨あめを吹く 我われ 天下てんかの為ために 斯このの人ひとを哭なす (B-368頁)

を「情詞双絶」と賞讃している。雅語を以って裕朗西の堂々たる事蹟を述べ、あわせて三十年来の友を一朝にして失った悲しみを巧みに表現している。

「自然」さについて

『四話』でとくに目立つのは「天衣無縫」という評語で六回も出現する（A—188, B—326, B—373, B—470, B—497〈2回〉頁）。また、「文章はもともと天成、妙手たまたま之を得」ということばが四か所（B—338, B—444, B—495, D—580頁）にわたって引用されていることでも明らかのように、李伯元は詩にせよ、詞や聯にせよ自然で無理のない作風を愛する。「天衣無縫」という語に類似した評語として「妙、自然に造る」三回（B—352, 490, D—560頁）、「天造地設」二回（B—336, 497頁）、「純乎天機」（B—509頁）、「妙語天然」（B—501頁）、「音節自然」（A—188頁）、「みな極めて自然」（D—581頁）、「自然を貴ぶ」（D—580頁）、「天籁」（C—527頁）が各々一回出現する。

これら明確に自然さ、無理のなさを賞讃している部分のほかに「実を失するを嫌う」（B—319頁）とか、「その長所は議論を表に著さず、自然に言外に指す所を会得できる所にある」（B—372頁）とか、「ひじょうにのびやかである」（B—314頁）とかいう評語が見える。

そして、この自然さを尊ぶ姿勢と関連するのであろうが、風景その他に対しても「真に一幅のすばらしい絵である」（A—121頁）、「摹仿、真に迫る」（B—469頁）、「善く物の情を体す」（A—72頁）、「躍然として出づ」（B—508頁）、「よく矮屋の光景をして紙上に躍然たらしむ」（B—493頁）、「月を絵き星を絵き水を絵き声を絵き、その美しさはそれ以上つけ加えることがないほどである」（C—531頁）、「わずか数語で八方ともに到っている」（A—126頁）、「栩栩として生きているが如きである」（A—279頁）、「形容ことごとく致る」（A—96頁）、「描写、神に入る」（A—260頁）、「情態を描写し曲折生きるが如きである」（C—532頁）などと評している。

では、どういう作品を「文章はもともと天成、妙手たまたま之を得」と評しているのだろうか。某氏の“雪妓”をみてみよう。

顛狂柳絮隨風舞。輕薄桃花逐水流。

顛狂なる柳絮は風に随いて舞い

輕薄なる桃花は水を逐うて流る (D-580頁)

綿のように乱れ飛ぶ柳絮を顛狂と形容し、ヒラヒラと水の上に散る桃の花を輕薄と表現し、風と水、随うと逐う、舞うと流るを対句に仕立てた点、なかなか巧みだと思われる。

さらに“五方を五行に対す”では、「昔、尚書の金某が都に華美な屋敷を造ったが、その時はまだ外敵を平定していない時期であったので、同平章事の某公が嘲笑して一つの上聯を作って曰く：

火熱水深。金司徒大興土木。

火熱水深。金司徒大いに土木を興す

金尚書はすぐさま応えて曰く：

南腔北調。中書令甚麼東西。

南腔北調。中書令甚なにも麼のぞ東西 (圈点は引用者)

蓋し、某公は官音を話すことができなかつたので方言でしゃべっていたのであろう。……思うに東西南北中を以って金木水火土に対したのは天衣無縫というべきである。その巧妙さは比類がない。」(B-470頁)と絶讃している。

一見、何の変哲もなさそうな各々独立した単語の羅列の中に五方を含め、それに直ちに五行を対置した兩人の技量は並のものではない。発想も新鮮で、とくに下聯の“中書令”という最高の官位に対して“甚麼東西”という土語、しかもやや輕蔑を含んだ土語を配した点、この兩人の日頃の確執ぶりさえも想像されて興深い。

もう一つだけ例をとれば、楊光溥⁸⁾が唐の香奩⁹⁾を集めた詩九首を「風に出

で雅に入り音節は自然で、腋(脇の下の皮)を集めて裘(皮衣)を作るように天衣無縫である。これを酒席で朗誦すれば齒頰ともに芬^{こう}ばしい」(A-188頁)と評している。その中の二首をあげてみよう。

(その六)

倚闌無語倍傷情。夜合花開香滿庭。
羌管一声何処笛。斜風細雨不堪聽。

闌に倚りて語無く ますます情を傷む
夜合花 開きて 香は庭に満つ
羌管一声 何処の笛なるや
斜風細雨 聴くに堪えず (A-189頁)

(その七)

郎上孤舟妾上樓。感時傷別思悠悠。
離心不異西江水。流到瓜州古渡頭。

郎は孤舟に上り 妾は樓に上る
時に感じて別れを傷めば 思い悠悠たり
離心 西江の水に異ならず
流れて瓜州の古き渡頭に到る (A-189頁)

『香奩集』そのものが閨房の女性や宮女の窈窕たる姿、美しく化粧した姿などを詠っているので当然ではあろうが、それを換骨奪胎した楊光溥のこれらの詩もまた女人の愛と悲しみを美しく詠いあげている。いかにも「閒情艶体」の作

- 8) 明、沂水の人。号は沂州。成化の進士。著に剪燈瑣話、沂州文集などがある。
9) 晩唐の韓偓は好んで閨女、宮娃、窈窕、臙脂の態を詠い、それらの詩を集めたものを香奩集という。そのため、このような婦人の艶情・媚態・閨怨などを歌ったものを香奩体と称するようになった。

を愛する李伯元の好みそうな詩であるし、この詩自体、まるで創作詩のように出来上りにも無理がなく艶麗である。

方言俚語について

『四話』でもう一つ特徴的なことは「俗語文体の流行は文学の進化の一つのあわれ徴れである」(A-230頁)と言ひ、方言俚語にもしばしば言及していることである。「広東省の方言は中原と異なっているが、珠江の女兒が常にうたう“粵謳”一篇は、文を知る者がいつも神品と感嘆している」(A-230頁)と俗語をも賞讃している。だが「かの口頭俗語のようなものもまた自ら相配合するものがある」(B-495頁)が、しかし「俚語を詩に入れるにはどうしても才力が伴わなければならない」(A-229頁)と考へる。

呉趺人も同じく彈詞曲本などの俗語文学に注目していたが、呉趺人の方はそれらが「忠孝節義を唱導している」¹⁰⁾ というもっぱら道德的感化力の面からその効用を認めたのに比し、李伯元の方はそれを文学そのものの問題としてとらえている所にこの両者の大きな相違点がある。例えば李伯元は「方言俚語には自ら絶妙な好詞を形成しているものがある。沅水と湘水の間にはさまれた地方の子供たちが唱う“風、荷葉を吹きて船頭を打つ”という一句は、それを唐人の三昧集の中に置いてほとんど楮葉を弁ずることはできない。“月子彎彎として九洲を照らす”¹¹⁾の四句といえどもこれよりよくはない」(A-197頁)と言う。

さらに「前朝の説部俚語にはひじょうに寄託がある」として、詩を六首あげている。まず、その第一首“曉に仙を学ぶ”；

服藥求長生。莫如孤竹子¹²⁾。

10) 阿英著『小説二談』「呉趺人的小説論」 古典文学出版社 1958年 80頁 詳しくは拙稿「呉趺人——憂愁から厭世へ——」 中国文芸研究会『野草』第12号参照。

11) <雲麓漫鈔、吳中舟師歌>「月子湾湾照九洲、幾家歡樂幾家愁」雲麓は宋の留元剛の号。『雲麓漫鈔』は15卷。宋の趙彦衛撰。

12) 殷の墨胎初のこと。字は子朝、孤竹国に封ぜられたので孤竹君と称す。伯夷はその長子、叔齊はその末子である。

一食西山微。 万古長不死。

服薬して長生を求むるは
 孤竹子に如くは莫し
 一たび西山の微を食すれば
 万古 ^{とこしえ}長に死せず (A-216頁)

また、にわかには尊い身分になった人をそしった第二首“^{しゅん}鷗吻¹³⁾を詠ず”

而今拾在青雲上。 忘却当年密内時。

^{いま}而今は^{あが}拾りて青雲の上^に在り
^{むかし}当年の密内にありし時¹⁴⁾を忘却す (A-216頁)

元人が脱脱丞相¹⁵⁾を弔った第六首；

百千万貫猶嫌少。 堆積黄金北斗辺。
 可惜太師無脚費。 不能搬運到黄泉。

百千万貫 ^{なお}猶 少きを嫌う
 黄金を堆積す 北斗の辺
 惜しむべし 太師に脚費 無く
 搬運して黄泉に到る能わざるを (A-217頁)

などをあげ「みな妙語である」(A-217頁)と評している。俚語であるためによ

13) “鷗吻”は“鷗目虎吻”の略。ふくろうの目つきと虎の口つき。残忍で凶暴な人形を言う。

14) 密は瓦や陶器を焼くかまどのことであるから、この人は富貴の身分になる前はおそらく密業に従事していたのであろう。

15) “脱脱”は元人の姓。

りいっそう諷刺が冴える、ということもあるであろう。第六首めの「黄金は積み上げるほどであるのに運搬費がないためそれを黄泉の国まで運べない」という時、“脚費”という俚語は誠にそのものズバリであり、このことばが使用されていることによってこの詩の諷刺性と諧謔性がより盛り上がりを見せているように思われる。

『天演論』などの影響を受けたとは言え、この李伯元のように「俗語文体の流行は文学の進化の一つの徴れである」とまで言い切った例を、私は少くとも清末作家の中では他に知らない。“文語から口語へ”という文体の変化の趨勢を的確に把握していたことは、すでに1897年から『游戲報』や『海上繁華報』を発刊して小報界の開山の祖となっていること、および梁啓超主編の『新小説』に呼応して1903年、他に先駆けて『繡像小説』を発行したことなどとともに、李伯元の時代の趨勢に対する鋭い認識力を示すものと言えよう。

李伯元と詩界革命

「新意境を以って旧風格に入れる」というのは、梁啓超が〈詩界革命〉を唱導する中で強く主張したことであるが、李伯元もそれを支持していたようで、たんに新名詞や新語が使用されているだけの詩には、どんなに新しい感覚を備えたものであっても高い評価を与えない。李伯元は「詩を作るさい西洋語を使うのは至難の技だ。というのは西洋語は訳音に重点を置くため粗野になるか難渋にすぎるかで、一つとして詩材になり得るようなものはない。私が見た近人の詩の中では、ただ宋石子の“香港の永安閣において月漁先生に和す”二絶がやや人意を強うするのみだが、一絶は忘れてしまった」(A-215頁)として次の一首をあげている。

潮打黄昏海色凄。一樓風雨澳門西。

愁聽架上紅鸚鵡。語學西洋的令低。

潮は黄昏を打ち 海色 ^{すさま} 凄じ

一楼の風雨 澳門の西

架上の紅鸚鵡を愁聴すれば

語は学ぶ 西洋の“的令低”¹⁶⁾ (A-215頁)

この詩について李伯元は「英語は(詩語としては……引用者註)きわめて不当であるのに、味わい深く詩の中に入れた所は絶技と言えよう」と評し、「かつて創作西洋竹枝詞百首を見たが、外国語だらけで文理などなく、まるで英語の一読本のようにであった」(A-215頁)と付け加えている。

その他、新名詞を詩詞中に入れたものとしては、梁啓超の“自由の人は遠く天涯は近し”を「巧みにして雅を傷っていない」(A-265頁)と評している。梁啓超は黄遵憲の詩をことに頌揚したが、李伯元もまた黄遵憲の遺詩“夜、秦淮に泛べて実甫に和す”三章を紹介して「吉光の片羽、また珍重すべきである」(A-174頁)と評している。その一と三を次にあげよう。

(その一)

九洲莽莽匆匆走。両鬢蕭蕭漸漸枯。
隔絶蓬萊来附鶴。折余楊柳可藏烏。
筆留白石飛仙句。袖有青溪小妹図。
猶是人間乾淨土。莫将楽国当窮途。

九洲莽莽 匆匆として走り
両鬢蕭蕭 漸漸として枯る
蓬萊に隔絶するも 来たりて鶴に附す
折余の楊柳は 烏を藏すべきや
筆に白石の飛仙の句を留め
袖に青溪の小妹の図 有り
猶 是れ 人間の乾淨の土
楽国を^も将って窮途に当つること莫し (A-174頁)

16) 宋石子の自註によれば“的令”は“飲む”意であり、“低”は“お茶”のことである。

(その三)

一卷先生自挽詩。神枯心死賸情痴。
 杜鵑再拜無窮淚。烏鵲三飛何処枝。
 生入玉門雖不願。上窮碧落究誰知。
 尺書地下君先問。只恐回書說暫離。

一卷の先生 自ら挽む詩
 神枯れ 心死し 情痴を賸す
 杜鵑 再拜す 無窮の涙
 烏鵲 三たび飛ぶ 何処の枝
 生きて玉門に入ることを願わざると雖も
 上りて碧落を窮むること究に誰か知らん
 地下に尺書して君に先ず問わん
 只恐る 書を回して暫く離るるを説くを (A-174頁)

そして「公度の詩は自ら別に一新面目を開くことを命じているのであって、
 軽卒に書いているのではない。この三律も意境は幽深であるが、しかし字句は
 却って流麗である」(A-174頁)と賞讃している。

また「新名詞に熟した例」として某君の“学生を咏ず”五律一首をあげる。

異族称同種。野蛮甘合羣。
 熱心平等説。流血自由文。
 排滿義勇隊。維新革命軍。
 寄言学生界。思想漫無倫。

異族 同種を称し 野蛮 合羣に甘んず
 熱心に平等を説き 血を流す 自由の文
 排滿義勇隊 維新革命軍
 言を学生界に寄す 思想 漫れて 倫 無しと (A-280頁)

新語をふんだんに取り入れ従来の詩とは異なった新しい感じを出している。それに対して、同じく新名詞を使用しているとは言え、広東省の某君の“友を寿ぐ”という次の一詩は「まったく餓鬼道，畜生道だ」(A-265頁)と痛罵している。

大舞台中一少年，亦狂亦俠亦翩翩。
地輪四九球初転，世界三千月正円。
我仏生生無寿夭，美人面面尽姻縁。
要将祝典留花界，艶説人間李謫仙。

大舞台中の一少年

また狂また俠また翩翩

地輪四九 球 初めて転じ

世界三千 月 正に円し

我が仏は 生生 寿夭 無く

美人は 面面 姻縁を尽くす

もし将に花界に留まって祝典せんとすれば

人間に艶説す 李謫仙 (A-265頁)

この詩を李伯元のように「餓鬼道畜生道」だときめつけるのは痛烈すぎるにしても、新味を出すことをねらいすぎて表現が熟していない感があるのは免れない。冒頭の二句「大舞台中の一少年 また狂また俠また翩翩」は、「大舞台」という語も大上段に振りかぶりすぎているように思われるし、「また狂また俠また翩翩」も奇をてらっている感じがする。三句目の「地輪」というのは五輪の一つの金輪のことで、水輪の上にあって世界をつなぎ、須弥山など九山および八海・四洲を載せる一地層のことである。ゆえに「四九」というのはその九山四洲を指すのであろうが、十分にこなれた表現とは言い難い。新名詞をちりばめて新奇さを出そうとするあまり、かえって李伯元の嫌う「雅を傷う」結果におちいつている。

このように見てくると、李伯元が張治秋尚書について「士を取ることきわめて公平で、その新思想を以って旧風格に入れる者で、科挙に高位で及第しなかったり、状元にならなかつたりした者はいない。だが、日本名詞で埋め尽くされた答案一巻を他の試験官が強く推せんした際、張尚書は動ぜずついにそれをしりぞけてしまった」(C-528頁)と張尚書の態度を賞讃しているのもうなづけよう。

李伯元は例えば「周鉄真は長沙の人で觀察に任命されたが、頑固なることまるで石のごとく、変革するなどとても不可能なことだ。著す所の書物はみな極力西洋の人物を誇っており、その迂妄なる所は憐れむべく笑うべきである」(B-346～7頁)と述べていることにも見られるように、維新変法運動や西洋文化についても理解を示し、一定程度の支持をしていた。そういう思想的・文化的基盤を持っていたからこそ、本節で述べたような〈詩界革命〉に対する肯定的姿勢も生み出されたのであろう。

む す び

『四話』についてまず言えることは、他の清末の“譴責”小説作家は「詩話」とか「詞話」の類を残しておらず、その意味では李伯元のこの『四話』の存在そのものが清末の文壇においてはひじょうに特異であるということである。ましてこの『四話』という題に示されるように「詩話」「聯話」「詞話」「叢話」と幅広いジャンルにわたっているものは珍しい。もちろん他の作家たちも各々に幼少の頃から科挙の勉強を積み、詩作もしてはいるが、「詩話」の類はない。その点では、李伯元自身の研究資料としてだけではなく、清末における詩や詞や聯を検討する上でも、これだけまとまった大量の業績を残している『四話』はもっと注目されてしかるべきではなかろうか。本稿は『清末小説研究』という雑誌の原稿であるため、小説家李伯元その人と『四話』との関連に重点を置いて考察を進めたが、別稿ではもっと広い視野から清末詩壇における『四話』の座標といったことを考えてみたい。

それはともかく、李伯元も旧士大夫の一人らしく心底では科挙の及第による

功名に憧れていたようで、梁文莊公が親に孝養を尽くすために暇を乞うた時、天子から「萊衣昼永」（萊衣、昼は永し）という四字の扁額と、「翻祝還朝晩，卿家慶更深」（翻って朝晩還を祝えば，卿の家の慶びは更に深し）¹⁷⁾ という詩を賜ったことについて、「天子のおことばの懇切なることこのようであれば，^{つぎ}備さに恩榮を極むと謂う可きである」（B-421頁）と言っている。李伯元の手の届かない世界に対する憧れと羨望の念は，このことばからもうかがえよう。天子から詩を賜われることのできるような境遇には，終生なりたくともなり得なかった李伯元は，冒頭で紹介したように古稀老人が「（李伯元は）著述をして自ら娛しむ」と評し，吳趸人も「（李伯元の）著作はどうして自身の背丈くらいにとどまっているなどということがあろうか。（その多作ぶりもまた……引用者註）つまりは世を憤り俗を嫉んでいたせいである。だが，年わずか40にして鬱々として亡くなってしまった」¹⁸⁾ と悼んでいるように，新聞雑誌の編集や著述の中に己の生き甲斐と，士大夫としての存在価値を見出していたのであろう。李伯元は維新変法運動に共感しながらも旧士大夫的な功名に憧れる意識からも脱却できないという未分化の状態にあるが，『四話』もまたそれを反映して誠に種々雑多な作品の寄せ集めであり，そこにこそ『四話』の特徴とおもしろさがあると言えよう。

（むぎお とみえ）

17) 周の老萊子が70才になっても着て，老いた親の心を慰めたという五色の衣。

18) 吳趸人「李伯元伝」 范煙橋著『中国小説史』 華夏出版社 1967年 212頁